

旅順からの引揚記

福島県 神田守雄

はじめに

平成十九（二〇〇七）年一月、私は脳梗塞を患い、南相馬市立病院に入院。二月には一時退院しましたが、言葉のリハビリのある福島市の「わたり病院」へ転院。

同病院を四月に退院以来、半年間は福島市に住む息子の家から「わたり病院」に通院していましたが、今は相馬市の自宅に戻って妻と二人の生活に慣れ親しんでいるところです。幸いにも脳梗塞による後遺症は軽く、字も書けるし人前でしゃべることもできます。

終戦から六十余年が過ぎ、旅順市での生活や学徒動員のこと、そして日本に引き揚げるまでのことなど当時を振り返っていると、それらのことを今書いておかないと後世に残すことができないという、責任感のようなものを感じています。私が終戦を迎えたの

は数え年十五歳のときであり、あの当時経験したこと
を思い出しながら、日本内地に無事帰国するまでを書
くことにしました。帰国してから知った満州、中国大
陸、そして朝鮮の奥地から引き揚げて来た人たちの苦
勞に比べれば楽な引揚記ですが、紛れもない私の体験
記です。

一 旅順へ

私は、昭和五（一九三〇）年二月十七日の東京生ま
れで、現在七十八歳になりました。昭和八年十二月、
一家を挙げて旅順市に移りました。私は数え年四歳で、
上には十一歳の兄勝夫と九歳の兄光二という二人の兄
がおり、下には生後四カ月の妹久子がいて、兄妹四人
でした。

旅順は海に面しているために、大陸性ながら穏やか
な気候でした。当時関東州庁が所在し行政の中心地で
あったので、陸海軍の国防上の要地でもあり、旅順工
科大学をはじめとして各種の学校も多く、文教地区で
もありました。街中は閑静で、我が一家もここでの生
活にすぐに慣れて、兄妹はみんな幸せに育てられてい

ました。私は、昭和十七年四月、旅順中学校に進学しました。当時大東亜戦争も、緒戦の赫々たる戦果によって旅順も沸き立っていました。日が経つにつれて戦況はだんだんと厳しくなり、先生方も次々に召集を受けて学校を去って行きました。

そのうちに、私たちも周辺の工事現場や軍需工場などに勤労働員がかけられて、働くことが多くなりました。戦争に勝つためには致し方ないことと覚悟を決めました。勉強のできないことには寂しさを感じたものでした。

二 動員に次ぐ動員

昭和十九年四月、三年生になるとすぐに、大連の甘井子にあった針線工場に動員されて、針金や釘を造る作業に従事したり、昭和二十年四月には学制改革で五年生は繰り上げ卒業となったので、四年生が最上級生になり、動員先も旅順工科大学の冶金学教室に変わりました。選ばれた学徒の一員として、モリブデン鋼が電球のフィラメントに使用できるかどうかの研究助手として配置されていました。

三 八月十五日前後のこと

八月十四日、旅順医学専門学校の次兄光二は、学徒動員で朝出掛けたはずなのに戻って来ました。そして「明日十五日正午に重大なラジオ放送があるので家で聴くように」とのことで、動員が解散になったとのことでした。十四日には、「十五日正午に重大放送あり」という予告放送が、何度も何度も繰り返し放送されました。

十五日の正午前、私は旅順工科大学構内でラジオ放送の聴ける場所に、大学関係者一同と共に集まっていました。正午、放送が始まりましたが、ラジオの調子が悪くて、「ピーピー、ガーガー」という雑音が入り、肝心の重大な話はよく聴きとれないのでいやになって、途中で研究室に戻っていました。放送が終わり戻って来た同僚から、「日本は連合国に無条件降伏をした」ことを教えられたのです。戦争に負けるなどとは夢にも思ったことがありませんでしたので、無条件降伏ということに対して言うに言われぬ抵抗を感じましたが、天皇陛下が御自ら「耐え難きを耐え、忍び難きを忍び」

と言われたと聞けば、納得しなくてはならないと自身に言い聞かせました。

これからの細かい処理の話、特に外地に住んでいる者に対する明確な指示や指導は何も無かったというところで、私たちは当座どうすれば良いのか分かりませんでした。

学徒動員の仲間が「殉死」するのではないかと心配する声もささやかれたこともありましたが、その後の話で「殉死」することはないことが分かって、ほっとしたことを覚えていきます。

翌日の夕方、旅順中学校のハンチャラ先生というあだ名のある桃井先生から、「羊頭窪（ヤントウカ）にある監視哨勤務に行ってくれ」という電話連絡が家にいた私にあった。私はすぐに「戦争は終わったのではありませんか？」と反論したが、「軍部から何も言ってこない。続ける！」とのことでした。羊頭窪は、旅順市の西郊外にある老鉄山の西麓から北に向かって鳩湾が広がっていますが、その一角にある窪地で、戦中には戦時中对空監視哨が置かれていました。その監視哨勤務

に、旅順中学校からも在校生が数人ずつ交代で服していて、日夜、敵機襲来の警戒にあたっていて、目撃情報を速やかに警察本部に電話通報するのが任務でしたが、その勤務に行くようにとのことです。

私には何か引掛かるものがありました。指示に従い準備をして指定された場所に行きました。そのころでも家に電話があるのは少なかった。学校でも連絡がしやすかったのではなかったかと気がついたからでした。その監視哨勤務には、一カ月前に一度行ったことがあり、詳しいことを聞かなくても様子は分かっていました。このときには、同級生の吉田邦史君も一緒だったように思いますが、今ははっきりと思いません。そのときの仲間は六人でしたが、すべて新市街に住む者ばかりでした。車で監視哨に行った記憶はあるのですが、どんな車に乗ったのか思い出せません。

監視哨勤務は、飛行機の爆音を聴いたときや機影を見たときに本部に電話連絡するのが任務でした。勤務について間もなくのこと、飛行機の爆音を聴いたので

本部に電話をしたところ、「今さら何を言っているのか？」という、わけの分からない内容の返事が返ってきました。私はその返事を聞いて、「私たちは何のために勤務しているのか？」と思いましたが、仲間には言えませんでした。

監視哨勤務に就いて三日目の夕方。中国の山東省から逃れて来たという軍人さん二人と民間人の数人が、エンジン付きのジャンク（帆を張ることのできる木造船）で監視哨の下の小さな港に到着しました。このことがきっかけとなって、「このまま監視哨勤務を続けていると、我々中学生も捕虜にされる怖れがあるだろう」との理由から、その日の夜十一時ごろに、軍人さんたちと一緒に私たちが乗って来たトラックに再び乗って家に戻りました。その軍人さんたちのそれからの行動は、何も分かりません。途中で見たお月さんが、真ん丸で大きく輝いていたのを、今も忘れ得ない光景です。後日、十数年経って知ったことですが、旅中創立五十周年記念誌（昭和三十八年十月一日発行）の中で、笠原親太郎君が書いていましたが、私が監視哨勤務に

就いている間に、旅順中学校は閉校になっていたので。当時、仲間の一人が「学校に監視哨勤務から戻って来たことを報告に行ったところ、学校にはだれもいなかったの、行っても駄目だ！」と言っていたので、私も学校に報告することをしませんでした。

監視哨勤務から戻った翌日、旅順高等女学校から、在校生三人、そのうちの一人は父が保証人になっていたが、その三人を引き取ってくれないかと申し入れてきた。その子たちは、旅順高女の寄宿舎にいた中国山東省から入校していて、家族に引き渡すことが困難だったのです。

事情が事情ですので、ともかく三人の女生徒を預かることとなり、引揚げ後日本で家族に引き渡すまで面倒をみることとなりました。

四 ソ連軍の進駐

そんなことがあっても、帰国がすぐできるものと思っていましたから、別に苦にしていまませんでした。呑気な気分で過ごしていた数日後のこと、八月二十二日、旅順市に進駐して来たソ連軍の兵士が突然日本人の家

にやって来て「二時間以内に強制退去するよう」に申し渡された家があるといううわさが伝わってきました。そのころだったと思いますが、夕方ソ連軍の星のマークをつけたグラマン戦闘機多数が旅順市の上空に飛んで来て、超低空飛行を繰り返したこともありました。

私たちの家族は、旅順市の新市街高崎町の木造官舎に住んでいました。父久太郎は関東州庁の警察官教習所で柔道教師をしており、また旅順海軍要港部で勅任官待遇の柔道教師もしておりましたので、官舎に住んでいたわけです。建物は木造ですが各部屋の窓は二重窓になっており、八畳間二部屋続きの間には、黒くて丸い形のペチカが設備され、寒さ対策もばっちりの家でした。庭も広くて畑などを作っていました。しかし、両隣はロシア建築のレンガ造りの家で、周辺にもレンガ造りの官舎がたくさんあって、木造の家に住む私たちは当時肩身の狭い思いをしていたものでした。そんなことから、木造へのコンプレックスを逆手に、自分たちの住む木造の家はソ連兵には不向きで生活しにくい家とソ連兵も思うだろうと、身勝手に思い込んでい

ました。自分の家は、時間決めをして強制退去をさせられることは無いと自分本位に決めていたことが誤りであったことを、数日後にいやというほど味わうことになったのです。

ある日の午後一時少し前、私たちが遅い昼食を食べているところに、着剣した銃を持ったソ連兵が突然現れました。そのソ連兵は自分の腕時計を私たちに示して、午後四時までにここを明け渡せというのです。私たちは、不意を食らって正直慌てました。時間を切った立ち退きは人ごとのように思っていたものですから、万一に備えた準備もしていませんでしたし、行き先も決めていなかったのです。取りあえず父と親しかった隣町の日進町に住む旅順高等学校柔道教師の毛利さんの家に引っ越すことにして、近所からリヤカーを借り、何度も何度も往復して身の回りのものすべてを運び込みました。応接セットや洋服箆笥などの家具は、ソ連兵の命令でそのままにしておくことになりました。

決められた時間を少しオーバーしましたが、父の知恵で監視の兵士を味方につけ、引っ越しは無事完了し

ました。毛利さん宅にお世話になっているときも、ソ連兵の略奪に遭ったりしましたが、しばらくは毛利さん宅で無事に生活していました。

それから二週間くらい経った九月の下旬ごろ、新市街の日本人は全員旧市街に移動するよう命ぜられ、第二回目の引越しとなりました。

移転するたびに整理するので、荷物が少しずつ減ってゆきます。前回は何度も往復して荷物運びをしましたが、このたびの移転はソ連軍からの規制もあって、新市街には二度と戻ることができない行ったきりの引越しだったので、日常生活に必要な最小限の家財などにしぼっていました。引越し作業に頼んだ中国人の荷馬車三台には、着る物などは最小限にして、主として食糧中心の荷物でした。主な食糧は、高崎町の近くにいた陸軍の通信隊が移動する際に残してくれた米五俵と海軍が移動の際一時滞在した旅順工科大学内に置いて行った小麦粉三袋と砂糖一袋でした。この引越しは急な命令でしたから、旧市街には空き家を貸してくれる人が見つからなかったので、名前は思い出せる

が旧市街に昔からあった料亭跡を三世帯で借りることとなり、私たち一家もその一室に移った。もう一つの部屋には、預った旅順高女の生徒三人と妹の久子を住まわせることにしました。それからしばらくはそこで生活することができました。中ソ友好条約が締結され、旅順市全体が占領軍の管轄に置かれソ連軍の街になるということから、日本人全員大連市への移動を命ぜられました。十月初めだったと記憶しています。

五 旅順から大連へ

移動には、各自行李・布団袋各一個ずつと荷物の制限をされ旅順駅から列車を利用するように言われましたが、列車利用では荷物の制限があつて食糧が運べないので、中国人の荷馬車二台を頼み、私たちは荷馬車と共に旅順大連間の約四十キロメートルを歩いて大連市に向かったのです。荷物の箱には、途中でソ連兵の検問に会うことを予め考えて中の荷物が見えるように、スノコ状の蓋をしていました。私たちは身体検査に備えて、学生帽の中に日本銀行発行の大きな一円札を大事に入れていました。もう少しで大連市にたどり着く

という星ヶ浦海水浴場付近で、案の定ソ連兵の検問に遭いましたが、こちらも用意周到だったので被害僅少で済みました。

大連市では、父の友人である若菜町の齋藤さんを頼ってお世話になり、そこでは約六カ月ほど滞在、齋藤家の家族三人と一緒に生活をしました。齋藤家では主人が警察官で、そのころは既にソ連軍によって抑留されていました。共同生活の間に、旅順から運んで来た食糧はあらかた消費していたので、食べる物については、近所に住んでいた年寄りから薩摩芋の粉を使ったカンコロ餅の作り方を教わり、それを作ってよく食べたものでした。そのカンコロ餅に製粉所から麩ホウキヤンをもらってきて混ぜ入れたこともありますが、これはまづくて食べられたものではありませんでした。米が値上がりしていて米を買うことができないため、そのころの日本人は高粱粥を主食にしていました。高粱コウリヤンだけを粥にして食べていると「ペラグラ」という病気に

なり手足が紫色になって壊死するということでした。実際にその病気になって死んだ人もおりました。お粥の中に小豆を少量入れて食べると、壊死を避けられるということを知ったのもこのころです。この粥も、またよく作って食べたものです。毎日食べているとだんだんと美味しく感じるものです。この間には、ニセアカシアの花の天ぷらや箒草の新芽、そして薩摩芋の茎を食用にすることも教わりました。これらの食べ物は、近所に住む年寄りの方に教えられたものばかりでした。このような「年寄りの知恵」を教わらなかったら、生きて帰れなかったと思います。

六 大連での出来事

そのころ、齋藤さんの家の近くの早苗町に一軒の空家があるというので、そこに第四回目の引越をしました。引越越しをしてから間がないある朝、まだ寝ているところへ数人の中国保安隊員が乗り込んで来て、父がファシスト要人の育成に関与していたとの理由で、父の身柄を拘束して行きました。長いように感じていましたが、拘留は十日間くらいだったと思います。私

は父のいない留守を守らねばならないと、まだ十六歳の年令もわきまえずに気負い立っていたものでした。

齋藤家での約半年間の生活中には齋藤さんの次男が大連第二中学校に通学していたので、私も同じ学校に転校、通学しました。下校後は「法蓮社」という葬儀社で働いていました。父は前述のようなことから、表に出て働けなかったからです。その代わり、父が持っていた衣類や鞆などを売り歩いて、糊口を凌いだこともありました。白米が一升百円のころ、法蓮社で一日働いて四百円を稼ぎましたから、家族の生活費は私の働きにかかっておりました。預かっていた三人の女子校生や妹たちは、餅問屋から大福餅を受けて来て、それを売って小遣いにしていたようです。女と知られると何をされるか分らないというので、当時の女の子は皆坊主頭にして男性のようなスタイルでいたものでした。

昭和二十一年三月、内地からの繰り上げ卒業に関する変更通知がないままに、私も他の人と同じく繰り上げ卒業の扱いを受けて、四年生で中学校を終えること

となり、大連第二中学校の卒業証書ももらいました。

翌二十二年の一月十一日、それまで一緒に生活をしておりました兄光二が病死しました。そのころは既に釈放されて家にいた父と母は、がっくりと気落ちしてしまいました。兄は旅順医学専門学校に在学中でしたので、病床でも寝ながら聴診器を自らの胸に当てて聴いており、「年内に帰国できれば俺は助かるが、来年になれば分らない」という言葉を残して肺結核で亡くなったのです。それから、ますます私の働きに頼る生活になっていきました。

そのころになって、日本人全員の日本への引揚げが開始されるとうわさされ始めましたが、だれも確実な情報は伝えてくれませんでした。いつ迎えの船がきてくれるのかについては、「来月だ」「いや来月からだ」とか「三月からだ」などという街のうわさしかありませんでした。

兄光二が亡くなる少し前、私たちは父の釈放を条件に、第五回目の引越しを命ぜられていました。引越し先は、戦時中のブルジョア街であり、かつて日本

企業などの幹部をしていた金持ちが住んでいた、日本人街桃源台というアパートでした。その地区は日本人

の比較的金持ちの多い住宅街なので、引揚げが最後になる地区と言われていました。結局は、父に対する罰則として、帰国の順番が一番遅いと言われていた所に移動させられたわけです。桃源台のアパートは四戸一棟造りで高台に建っており、その二階の一戸に移り住みました。日中、水の出が悪く、夜遅くになって地下室から水を汲んでおりました。そんなとき、巡回に来た保安隊員に「拳銃を隠したのだろう！」と言われ、頬を殴られたこともありました。側にいて見かねた母が「我的小孩」と言ってくれたので、それ以上の追及はされませんでした。母のしゃべった中国語を聞いたのは、後にも先にもそのときだけでした。

その後、その地区が中国保安隊幹部の宿舍地区になることになって、その地区に住む日本人の引揚げが早まりました。何が運を招くか分かりません。前に私たちが住んでいた齋藤さんたちの住む地区より、引揚げ

が早くなったのです。

私たちの生活の困窮も、いよいよ限界にきておりました。最後までとっておいた碁盤も、ストーブの薪になりました。この碁盤は、兄光二が元気なときに何度も対戦した私の宝物でした。

七 帰国の途に

昭和二十二年二月六日、待ちに待った引揚げの指示がきた。その指示がどこからきたのかは記憶にないが、早朝六時三十分ごろに迎えに来た車で引揚者収容所に行きました。収容所に着いたものの、そこは大きな倉庫で、以前関東軍が使っていたというものでした。私たちが持参した一世帯布団袋一個と各人のリュックサック一個の荷物は倉庫に入れてくれましたが、人は建物の外で待機させられました。旅順の二月の気温は日中陽の当たるときはまだしも、夜はマイナスになります。出国検査に手間がかかって、暗くなっても私たちは建物の外に出されたままでした。二月のことですから日の沈むのも早く、外にいる私たちは寒くて凍え死ぬかと思っただけでした。そのとき、引揚者団体の

役員の一人となっていた父が、先頭になって我々を屋内に誘導、荷物の所まで案内してくれたので、凍死から免れ助かりました。

出国の荷物検査はグループごとなのですが、全ての荷物を一つ一つ検査する方法と、時間で間仕切りを閉め、そのとき室内に残ったものの中からめぼしい荷物を数個を抜き取り検査する方法とがあったようです。私たちの後者でした。私たちが寝泊りのできる収容所の正規の部屋に落ち着いたのは、翌日の朝六時ごろでしたが、それからやつとひと眠りして体力を回復したのです。収容所に入ったものの、日本への引揚船がいつ来るのかは教えられませんので、不安の上無いです。私たちより数日も早く集められて収容所に入っていた人に聞いたところ、「一週間も滞在している」と言われ、ますます不安が募るばかりでした。しかし、仲間のだれかが聞いてきた話では「船が二隻来れば我々も今日にも乗船できる」と言うのですが、確かめる方法がありませんから、うわさにはなっていたものの、だれもあてにしている者はいませんでした。

収容所に入って三日目の二月九日の夕方、急にトラックに荷物を積んでその車に乗るようにと指示されました。私は荷物係をかってでて、その車で大連港の埠頭に行きました。一般の人々は埠頭まで約二キロメートルを歩いての移動でした。車が波止場に着くと、ソ連兵の指示で班毎に荷物を降ろす場所を指定されました。私たちが指定された場所にはあちこちに水溜りがあり、決して良い場所と言える所ではありませんでした。船が着いてみて分かったのですが、そこは船のタラップのすぐ脇でしたから、荷物の積み込みには非常に楽な場所でした。

父は、かつてシベリア出兵のとき軍務でモスクワ郊外に行ったことがありましたから、ロシア語を少し話せたこともあり、班の皆さんから扱金してもらい、収容所のソ連軍幹部にコミッションを手渡していたのが効いたのかもしれない。私たちは、とにもかくにも船上の人となっていました。これで日本の内地に帰れるのだという思いでいっぱいです。

私たちの乗った船は「第一大海丸」という貨物船で

した。私は四歳のとき東京から旅順市に移住しておりますので、日本内地のことは何も記憶にありませんから、帰国に関しては期待半分と不安半分でした。

八 母国に上陸・帰国

乗船出港してから、この船は長崎県の佐世保港に向かっていることを船長から知らされました。同時刻頃、大連を出たもう一隻の引揚船は、舞鶴港に向かっていることを知らされたのもそのときでした。私は、どこに連れて行かれようとも、日本に帰れることに変わりはないと思つたくらいのものでした。真冬の二月、真夏の八月の玄海灘は荒れると聞いていたのですが、予想に反して海路は途中荒れることなく四日後に無事に佐世保港に着き、上陸できました。私は荷物係なので荷物と一緒にはしけで荷揚げ岸壁に行きました。班の皆さんは収容所まで徒歩での移動でしたが、私たちより早く収容所に着いていました。二月半ばのことですから、佐世保港に向かう船の上は、晴れていても寒かったことを今でも忘れません。

収容された建物は、海軍の針尾航空隊の兵舎でした。収容所に入るとき頭からDDTの粉剤を振りかけられ、全身真白くなったことを今でも思い出します。そのころの私たちの体は、虱しらみの巢になっていました。翌朝、収容所周辺一面が雪で白くなっていたのが忘れ得ない光景です。その日は珍しく九州にも雪が降つたのでした。帰国手続きなどのことで、五日間ほど収容所にいたと思います。

この収容所にいた間に、旅順から苦難の日々を共にして連れ帰つた旅順高女生三人のうち二人の子を、ひと足先に九州に帰っていたそれぞれの父親に無事に引き渡しました。

二月十九日の夕方、いよいよ各家族の落ち着き先に向かつての出発のため、最寄駅に連れて行かれました。その駅名は国鉄の南風崎となっていました。南風崎の駅前で売っていた焼き大福を、空腹にまどわされて思わず買って食べましたが、世の中にこんな美味しいものはないと感じたことを、今思い出しました。たしか

一個一円だったと思いますが、引揚げの時に大事に大連から持って来た五十銭札が通用したので、それを使つたように思います。

私たちが乗った汽車は臨時列車でしたが、途中で一般客も乗せたので満員になりました。汽車のトイレに行つたものの、自分の席に戻るのに大変に苦労したことがたびたびありました。汽車の中でもらつた食事は駅弁が主でしたが、それを食べて腹下した私はトイレが近くて、暗いときは汽車の窓を何回もトイレ代わりに利用しました。

翌朝十時ごろに、汽車は品川駅に着きました。そこには三年前から千葉医大の学生だった兄勝夫が迎えに来ていました。当時兄は、在外父兄救出学生同盟千葉県幹事長をしていました。兄の案内で父の伯父の神戸さんの社宅に伺つた後、千葉市の神戸さんの自宅に連れて行かれました。当時神戸さんは国鉄尾久機関区長で社宅住まいでした。そこに一泊して、次の日母の実家がある福島に向かいました。

福島駅に着いたのは、昭和二十二年二月二十一日だ

と思います。福島駅には母の父の竹次郎祖父が迎えに来ておりました。いよいよ福島での生活が始まるとともに私たち一家の引揚げ行路は一段落したことになります。旅順から預かつて連れ帰つた旅順高女生の最後の一人も、二日後に先に福島県に帰国していた父親に引き渡し、その責任を果たしました。

九 私の生活再建

大連から引き揚げて来るときに、大連第二中学校四年の卒業証書をもたらしてきましたが、その前の旅順中学校の三、四年生の間は勤労働員で、ほとんど授業を受けていませんから、昭和二十二年四月福島に落ち着いてから、福島県立福島中学校の四年生に編入学させてもらい通学しました。

翌年には、学制改革で新制高等学校に変わったので、おのずから高校二年生になりました。しかし、父が終戦前の職業から公職追放令に引っかけり、引き揚げてから勤めていた福島県警察の柔道教師を辞めざるを得なくなつたので、私は福島高校を中退して福島地方検察庁に雇員として奉職しました。

そのころは就職難の時代で、仕事に就けるだけでも有り難いことでしたので、仕事一途に働き、昭和二十五年には検察事務官に任官することができました。昭和三十一年に職場結婚をした機会に、かねがね希望していた東京地方検察庁に転勤し、公判部で働きました。その翌年の四月から、東京の東中野にあった中野高校の校舎を借りて運営されていた、東京都接骨師会附属の柔道整復師養成所に入り、定年後のことを考えて、柔道整復師の免許を目指して勉強に励みました。

そのころ父は柔道界最高位の講道館九段で、昭和三十九年に東京で開催された東京オリンピックでは、初めて競技種目に加えられた柔道種目において、決勝戦の審判員として晴れの舞台に立ちました。

その父は、昭和三十二年に相馬市から招かれて、講道館修行所を開設し、接骨院を併設していました。ある日、私は父から「おれの助手にならないか？」と言われたのですが、私は養成所に通学している最中でしたので、「卒業するまで待つて欲しい！」と一度は断ったのですが、父の「後の一年は仙台に通え」というひ

と言で、仙台の東北高等鍼灸整復学校に変わりました。昭和三十四年四月には、念願叶って柔道整復師免許を取得できて、以来接骨院の助手として父を助けていました。

さらに、レントゲン写真診断の勉強もしました。そのかいあって、五十年間接骨院の仕事を続けてきました。また、本業以外に地域のために役立つことは、あれこれとなく進んで手がけて、それらの業績が認められて、県知事からの表彰や各種団体からもその活躍を認められるようになりました。

私の生きるための師表であった父は、昭和五十二年六月に八十一歳で柔道一筋の生涯を終えましたが、私はこのような父を親に持ったことは子として大いに誇らしく思い、父の名を汚さぬように今日まで生きてきたつもりです。

おわりに

終戦から、もう既に六十余年が経ち、あの当時の苦労を克明に表現しきれないもどかしさを感じるようになります。体験者がそうですから、戦争体験の無い

戦後生まれの人々には、なかなかその実体を知ってもらうことは難しくなってきました。戦争体験者の体験記録が、体験者だけの追悼記になってしまふことは残念の極みです。

当時の指導的立場にあった人たちが、敗戦後の同胞に対する対応についてもっと勉強していて、私たち無辜の者たちに適切な指導をしてくれたらという反省もあります。日本人全員が戦争に負けるなどと思ってもいかなかったことであり、致し方ないことだったと考えることにしています。今、この年になって感じるのですが、老人の知恵が私たちを生きて日本に帰してくれたと思っています。年寄りを大切にすることを忘れてきたことを、今さらながら思わずにはおれません。戦後六十余年を経過して、日本人の平均寿命が伸びて、年寄りの数が増えている現在、年寄りを邪魔者扱いにしている傾向が、あちこちで見られることを非常に残念に思っております。